

# 八百屋

三遊亭円朝

青空文庫



亭「今いま歸かへつたよ。女房「おやお歸かへりかい、歸かへつたばかりで疲つかれて居ゐやうが、後ご生しやうお願ねがひだから、井戸端ゐどばたへ行いつて水を汲くんで来てお呉くれな、夫それから序ついでにお氣きの毒どくだけけれど、お隣となりで二杯はい借かりたんだから手桶てをけに二杯はい返かへしてお呉くれな。亭「うーむ、水みづまで借かりて使つかふんだな。妻「其その代かはりお前まへの嗜すきな物ものを取とつて置おいたよ。亭「え、何なにを。妻「赤飯おこは。亭「赤飯おこは、嬉うれしいな、実じつア今日けふなんだ、山やま下したを通とほつた時とき、ぼツくと蒸氣けむが立たつてたから喰くひてえと思おもつたんだが、さうか、其その奴やつア有あり難がてえな、直すぐに喰くはう。妻「まアく喫たべるのは後あとにして、早はやく用もちを仕しちまつてから、ちよいとお礼れいに行いつてお出いでよ。亭「うむ。是これから水みづを汲くんで了しまひ、亭「ぢアま行いつて来くるが、

どこ  
何家から貰つたんだ。妻「アノ奥のね、真卓先生の許から貰  
つたんだよ。亭「うむ、アノお医者か、可笑いな。妻「ナニ可笑  
しいことがあるものか、何だかね、お邸からいゝ熊の皮を到來  
したとか云つて、其祝ひだつて下すつたのだよ、だからちよい  
とお礼に往つてお出。亭「何てツて。妻「何だつてお前極まつて  
らアね、承はりますれば御邸から何か御拝領物の儀に就き  
まして、私共までお赤飯を有難う存じますてんだよ。亭「お  
せきさんを有難う。妻「お前何を云ふんだ、おせきさんぢやない  
お赤飯てえのだ。亭「お赤飯てえのは何だ。妻「強飯のことだよ。  
亭「ムー、お赤飯てえのか、さうか。妻「でね、一番終に私も宜  
しくとさう云つてお呉れよ。亭「己が行くのに私も宜しくてえの

は可笑をかしいぢやないか。妻「ナニお前まへが自分の事を云ふのぢやない、女にようぼう房よろも宜しくといふのだよ。亭「うむ、お前まへがてえのか、  
 で何なんてんだ。妻「承うけたまはりますれば、何か御おやしき邸ごはいりやうものから御ごはいりやうもの拝ごはいりやうもの領ごはいりやうもの物の儀ぎに就つきまして私わたくしども共あまでお赤飯せきはんを有あ  
 の儀ぎに就ついて、私わたくしども共あまでお赤飯せきはんをお門多かじおほいのに有あ難がたう存ぞんじま  
 すつて。亭「少し殖ふえたな。妻「殖ふえたのぢやアありアしない、  
 当あたりまへ然ぜんな話わだよ。亭「其そんな様に色いろんな事を云いつちやア側そばから忘れ  
 ちまア。妻「お赤飯せきはんを有あ難がたう存ぞんじますつて、一ばん終まひに女にようぼう房あ  
 も宜よろしくと云いふんだよ。亭「エへく、何なんだか忘れさうだな、も  
 う一遍ぺんい云いつて呉くんねえな。妻「困うけたまるねえ、承うけたまはりますれば何か御お  
 邸やしきから御ごはいりやうもの拝ごはいりやうもの領ごはいりやうもの物の儀ぎに就つきまして私わたくしども共あまでお赤飯せきはんを有あ  
 難りがたう存ぞんじます序ついでに女にようぼう房あも宜よろしくてえんだよ。亭「え。妻

「本<sup>ほん</sup>当<sup>たう</sup>に子供ぢやアなし、性<sup>しやう</sup>がないね、確<sup>しつ</sup>りおしよ。亭<sup>てい</sup>「ア痛<sup>いた</sup>え、何<sup>なに</sup>をするんだ。妻<sup>あんな</sup>「余<sup>ま</sup>り向<sup>むか</sup>う脛<sup>すね</sup>の毛<sup>おほ</sup>が多<sup>おほ</sup>過<sup>すぎ</sup>るから三<sup>さん</sup>本<sup>ほん</sup>位<sup>ゐる</sup>抜<sup>ぬ</sup>いたつて宜<sup>い</sup>いや、痛<sup>いた</sup>いと思<sup>おも</sup>つたら些<sup>ちつ</sup>たア性<sup>しやう</sup>が附<sup>つ</sup>くだらう。亭<sup>てい</sup>「ア痛<sup>いた</sup>え。妻<sup>あんな</sup>「痛<sup>いた</sup>いと思<sup>おも</sup>つたら、女<sup>によう</sup>房<sup>ぼう</sup>も宜<sup>よろ</sup>しくてえのを思<sup>おも</sup>ひ出すだらう。亭<sup>てい</sup>「うむ、ぢやア行<sup>い</sup>つて来<sup>く</sup>るよ。是<sup>これ</sup>から衣<sup>き</sup>服<sup>もの</sup>を着<sup>き</sup>換<sup>か</sup>へ、奥<sup>おく</sup>のお医<sup>い</sup>者<sup>しゃ</sup>の許<sup>もと</sup>へやつて参<sup>まゐ</sup>り、玄<sup>げん</sup>関<sup>くわん</sup>へ掛<sup>か</sup>つて、甚<sup>し</sup>「お頼<sup>たの</sup>ま申<sup>まう</sup>す。書<sup>しよ</sup>生<sup>せい</sup>「どーれ、ヤ、是<sup>これ</sup>はお入<sup>い</sup>来<sup>いで</sup>なさい。甚<sup>し</sup>「エ、先生<sup>せんせい</sup>は御<sup>ご</sup>退<sup>たい</sup>屈<sup>くつ</sup>ですか。書<sup>しよ</sup>「別<sup>たい</sup>に退<sup>たい</sup>屈<sup>くつ</sup>も致<sup>いた</sup>しちやア居<sup>あ</sup>ませぬが、何<sup>なん</sup>です。甚<sup>し</sup>「いえ、お宅<sup>たく</sup>にお出<sup>い</sup>なせえますかツてんで…エへ…御<sup>ご</sup>在<sup>ざ</sup>宅<sup>たく</sup>かてえのと間<sup>ま</sup>違<sup>ちが</sup>ひたんで。書<sup>しよ</sup>生<sup>せい</sup>「さうか、ま此<sup>こ</sup>方<sup>ち</sup>へお上<sup>あ</sup>り。甚<sup>し</sup>「ア、お目<sup>め</sup>に懸<sup>か</sup>つて少<sup>せう</sup>々<sup>く</sup>お談<sup>だん</sup>じ申<sup>まう</sup>してえ事<sup>こと</sup>があつて出<sup>で</sup>まし

たんで。書生「お談じ申たい……エ、先生八百屋の甚兵衛さんが  
 お入来で。真「おやく、夫は能くお入来だ、さア、此方へ、何  
 うも御近所に居ながら、御無沙汰をしました、貴方は毎日能  
 くお稼ぎなさるね朝も早く起て、だから近所でもお評判が宜う  
 ござすよ。甚「え、何かソノ承はりまして驚入りましたがね。  
 真「エ、何を驚いた。甚「何だか貴方はソノお邸から持てお出な  
 すつたてえことで。真「エ。甚「盗んで来たつてね。真「何うも  
 怪しからぬことを仰しやるねお前さんは、私も随分諸家様へ  
 お出入をするが、塵ツ葉一本でも無断に持つて来た事はありません  
 ぬよ。甚「い、え夫でも確に持つて来なすつた。真「何うも怪し  
 からぬ事を、何ぼお前さんは人が良いからつて、よもや証抛の

ない事を云ひなさるまい。甚「エ、ありますとも、アノ一番奥の  
 掃溜はきだめ まへの前の家のお関さんせき いへ、彼の方が証拠人あ かた しようこにんです。真「証拠  
 人にんならお連つれなさい、此方こつちは些ちつとも覺おぼえのない事だから。甚「エへ  
 へ、へ、ナニおせきさんぢやない赤いソノ何なんとか云いつたつけ、う  
 む、お赤飯せきはんか。真「え、成程なるほど、夫それぢやア先刻さつきお前まへさん所ところへお赤  
 飯きはんを上げあた其その礼れいに來きなすつたのかね。甚「へい能よく知しつて居ゐ  
 ますね、横着者わうちやくもの。真「ナニ横わうちやく着やくな事があるものか、イエ  
 彼はほんの心ばかりの祝いはひなので、如何いかにも珍めづらしい物を旧主人きゆうしゆじんか  
 ら貰もらひましたんでね、実は御存知ごぞんち とほの通り、僕は蘭科ぼく らんくわの方は不得ふえ  
 手てぢやけれど、時勢じせいに追おはれて止やむを得えず、些ちつとばかり西洋医せいやうい  
 の真似事まねごともいたしますが、矢張やはり大殿おほとのや御隠居ごいんきよさまなど様杯みづぐすは、水

薬りが厭いやだと仰おつしやるから、已ま前の煎せん薬やくを上げあるので、相あひ変かは  
 らずお出入でいりを致いたして居ゐる、処ところが這このたび回たぶん多たぶん分ぶんのお手当てあてに預あづかり、其そのう  
 上へめづ珍づらかなる熊くまの皮くまを頂ちやうだい戴だいしましたよ、敷しきがは皮はを。甚へ  
 えーアノ何なんですか、蟄ひきがへるを。真ひきがへる「蟄ひきがへるぢやアない、敷しきがは皮はです、彼あれ所ところ  
 に敷しいてあるから御ご覧らんなさい。甚へ「へえー成なる程ほど大おほきな皮かわだ、熊  
 の毛けてえものは黒くろいと思おもつたら是こりア赤あかうがすね。真ま「いま山さん  
 中ちゆうに接すむ熊くまとは違ちがつて、北ほつ海かい道だう産さんで、何どうしても多おほく魚ぎよ  
 類るいを食しするから、毛けが赤あかいて。甚へ「へえー、緋ひ緘せの鎧よろひでも喰く  
 ひますか。真ま「鎧よろひぢやアない、魚ぎよ類るい、さかなだ。甚へ「へえー成なる  
 程ほど、此こ処こゝに弾てつぱう丸だまの穴あなか何なにかありますね。真ま「左さ様やうさ、鉄てつぱ  
 砲うきず傷きずのやうだね。甚へ「何どうも大たい変へんに毛けが長ながうがすな。真ま「う

む、うしぐま牛熊の毛はチャリくして長いて。甚「アおもひだ想出した、女に

ようぼう房も宜よろしく。

# 青空文庫情報

底本：「明治の文学 第3巻 三遊亭円朝」筑摩書房

2001（平成13）年8月25日初版第1刷発行

底本の親本：「定本 円朝全集 巻の13」世界文庫

1964（昭和39）年6月発行

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年6月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 八百屋 三遊亭円朝

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>